明石秋室の詩・書・人物について（二）

佐伯狩生熊義

(二) 秋室と子玉

前回は秋室の出生と生立ちを記したが資料不足で不明な点も多いが今後に期したい。

彼の生涯を通じて力を注いだのは中唐の鬼才李賀字は長吉の研究であったことは間違いがない。今回は詩を中心に述べようと思う。

秋室自作の詩も之に類似したものが多い。既刊書の『南豊名家詩選』と『秋室遺稿』の二書を通じて約百二十首の詩があるが七律三十首、七絶二十七首、七排律二十二首、五律十六首、五絶十三首の順である。

七律が最も多いのは充分その意見を言尽くせるし又得意でもあったろう。次に七絶の多いのは最もポピュラーな詩型だからであろう。

更に詳しく述べたい時には七言排律を利用するのが適しているからだろうと思う。

これらの諸形式を通じて表明した秋室の見識を分析し乍ら彼が李賀に対して如何なる態度で観察したかを追及してみよう。

「白玉楼中の人となる」とは文人の死を悼む語というのは李賀の為に作られた語であることはどの字典にも載っているが、錦嚢という語は錦の袋という意味から転じて佳作の詩とか詩嚢という意味になったのは李賀から出来た語である事はあまり知られていない。

唐書『李賀伝』に「賀小奚奴に錦嚢を背負わせ、詩を得る所に遇えば嚢中に投ず」とある。

小童を連れて錦嚢を背負わせ、その中に出来た詩を入れて帰ってから整理したことから佳作の詩又は詩嚢という意味に用いられるようになったというので、錦嚢と云えばすぐ李賀を連想するようになったようである。

『秋室遺稿』に錦囊と題する詩が載っている。子玉の詩にもこの語が出るが、まず秋室の作を紹介しよう。

錦　囊

錦囊自佩独吟苦　　錦囊自ら佩びて独り吟じ苦しむ
山竹相迎群嘯長　　山竹相迎えて群嘯長し
俯聴澗泉珠珮響　　府して澗泉を聴けば珠珮響く
廻看岑岫穀襟光　　岑岫を廻看すれば穀襟光る
断崖藤蔓度猿子　　断崖の藤蔓に猿子度り
一路柏風薫麝香　　一路柏風麝香を薫ず
踏破蘚花青漠々　　蘚花を踏破すれば青漠々
穿過雲気白茫々　　雲気を穿ち過ぐれば白茫々

唐書李賀伝を踏まえて李賀平生の詩作を詠んだもので、李賀の母がこの児は死ぬ迄心血を呕き尽くすであろうと云った言葉を裏書きする如く、錦囊を佩びて諸方を独吟し、山泉断崖を度り歩くこと猿子の如く、倦くことなく跋渉し続けて雲気に接するという吟行を詠んでいる。

中島子玉は十七才の時の詩にこう云っている。

煌煌たる河漠の影　　低く老柳の枝に在り
閑吟力己に倦み　　書を枕して空齋に臥す
故人恍として夢に入る　　顔容痩せて梅の如し
忽ち錦囊の底を探り　　我に贈る七字の詩
琅琅として金玉の如し　　語語一に何ぞ悲しき
醒来れば見る所無し　　蟲聲柴扉を繞る

この詩は佐伯から咸宜園に同時入門した僚友古田豪作の急死に逢い翌年同月彼が来て詩を贈る夢を見て、一詩を賦して述べた感懐だが、その中に奇しくも錦囊の語がある。之はこの時既に李賀を意識していた証拠であり、秋室との関係を示す証拠としたい。更に又秋室と子玉の詩風の相通ずるものの証として次の詩を比較して見たい。

秋室に狐嫁詞があり子玉に「狐公嫁女詞」がある。

狐　嫁　詞　　（俗諺曰日照雨狐嫁女）

雌風吹雲弄陰晴　　雌風雲を吹いて陰晴を弄す
阿紫嬌娘来受婚　　阿紫の嬌娘来りて婚を受く
高高双耳掲玉翹　　高々と双耳に玉翹を掲ぐ

脩尾揺曳金糸裙
郎家穴塚変洞房
老妖吹焔花燭光
髑髏為作合歓巵
風籟為歌撒帳詞
綢繆一夜約千歳
生前同穴亦可喜
苔花粘体錦繡熱
石骨支頭珊瑚紫

尾を脩め揺ぎ曳く金糸の裙
郎家の穴塚洞房に変じ
老妖焔を吹く花燭の光
髑髏為に作る合歓の巵
風籟為に歌う撒帳の詞
綢繆たり一夜千歳を約し
生前の同穴も亦喜ぶべし
苔花体に粘り錦繡の熱
石骨頭を支う珊瑚の紫

俗諺に曰く日照りの雨は狐の嫁女という解説を加えて、冒頭の雌風雲を吹くとは楊廉夫の句「湘江の雨脚雌風吹く」を踏まえ、阿紫の嬌娘とは李賀の句「真珠の小娘青廓より下る」に基づき、老妖吹焔以下は周孟侯の「龍宮花燭詩序」に「龍女昏を受く歓香の海」を意として作ったと自注を入れている。

聊か妖艶と云うか怪奇と云うか、此の世の様相ではないけれども、妖怪変化の無気味な化物屋敷ではない。異様ながらも朗々たる微笑があり明境があるところに李賀の詩境の持味があると云うべきであろう。それがそのまま秋室の詩境でもある訳である。

之に対して子玉の「狐公嫁女詞」を見れば、

狐公嫁女詞

狐公の詞前日は雨に映じ
怪なる妖雲陰り晴となる
古塚の阿紫窈窕の姿
人は道う姐己是れ前生
綵輿の嫁と玄丘の客
梁間綏々隊を成して行く
松葉釵と為し、果は珮と為す
九尾曳来りて宝帯軽し
腋下自ら千金の裘有り
粧奩の嫁具は他に営まず
一堂の華燭は陰燐に耽る
小妹は環侍し暈蛾青し
山君を欺き得て威は燒の如し
百獣陪宴して粛として声無し
上客の狸公腹を鼓と為し
崩々肯々と郎を迎えて鳴る

合譲りて纔に罷む洞房の閼
雲と為り雨となり夢初めて成る
一死寧んぞ忘れん首丘の志
千秋長結同心の盟
野史商量何ぞ荒唐たる
漫りに胡説を将て孩嬰を誑らかす
我も亦遊戯に枯筆を舐むれど
只恐る人、董狐の名を伝えんことを

此の詩は子玉の才力を見る代表作の一と目される如く、説き去り説き来って留まる所なく、懸河流水の弁を聞くが如き名作である。

広瀬淡窓は此の詩を評して「龍宮に遊ぶを夢みる詩よりも更に奇なり」と云い、昌平黌の教授古賀侗菴は「雅謔凡ならず」と評している。

此の詩は子玉が十六才で咸宜園に学び廿一才で学成り佐伯に帰り、翌年秋藩命で江戸昌平黌に学ぶ迄の間、藩学四教堂で秋室と共に子弟に教授していた間に十数首の作があるが、その時の作と云われている。

之は嘗て子玉廿才にして彦山に登り、「一泊法螺吹落す中峯の月、雲は冷やかなり三千八百の房」という名吟を残したのは蘇東坡の句と対比させられる程胸のすく様な絶唱振りであるがこの「狐公嫁女詞」にその痛快振りが感ぜられその才子の面目躍如たるものがある。

さてここで前回引用した佐藤義詮氏の『学禁余稿』に「子玉の淡窓に学んだのは大助の誘う所であるというが、他に両者の交渉を明かにする文献があることを知らない」とあり、『二豊人文志』には「秋室が淡窓に紹介したので、先輩たる秋室の影響も絶無ではなかろう」と云っているが両者の狐嫁の詞を比較すれば餘りにも影響の大きいことを感ぜざるを得ない。

だが結論を出すのは未だ早いかも知れぬ。

書証はないけれども両者の関係は大きな影響のあることは「錦嚢の詩」は子玉が単独の創作だろうか、学成りて後、佐伯に帰り四教堂で秋室と共に教授の任に当った一年有餘の間に作った詩がこれ程似通っているのを偶然の一致と見るべきだろうか。

秋室の作はその人柄から出る落着いた態度の中に一々例証を挙げつつロマンの世界を着実に表現するのに対し、子玉は煥発の才気というか妖艶にして発溂とした表現法

は、山陽や東坡に私淑していたらしさが出て天馬空を行くというよう気概を感じさせるものがある。

秋室、子玉という両者の性格の相違とは思うが、内に包蔵された詩風は、鬼才と云われた李賀の特異の境地を示すことは共通しているようである。妖気怪奇の中に漂う雅諧は倜菴の指摘する如く非凡な才力と芳芬たる遺彩を感ぜしめる点は秋室、子玉の着眼点ではなかろうか。清朝の愈樾はその著に子玉を高く評価して李賀の詩風を受継ぐ人と出したのは宜なる哉と思うのだが秋室の詩を見せたら何と云うのだろうかと想像してみた。

(三) 秋室の詩

一、苦吟行

先生吟鬢白于雪　漫誇錦囊富新篇
牢騒二十有余歳　誰憐窮巷老詩仙
皺眉揺膝耽佳句　家徒四壁寒蕭然
呕出肺肝長自苦　千章不直一文銭
嗚呼奇語驚人竟底事　自昔鬼神忌才子
君不見東野閬仙称作者　轗軻纔免饑寒死

生涯わずか廿七年の短い人生で老成一家の風ありという李賀の苦吟行、一文にもならぬ新篇の名作を錦嚢に収め続けた悪魔的な詩人を画きつつ自ら之に憧れ続けた秋室の心情、類似の悲運な孟東野の境涯、才は韓退之にも劣らずと云われつゝ不遇の生涯に終る。両者の苦吟を思いやれば寒さ蕭然として肌に粟を生ずるの感に堪えず。

二、読昌谷集

1.摛詞誰逐楚臣奇　細瘦王孫不世才
独惜呕心猶未盡　緋衣俄駕赤虵来

摛はリ又はチと読む。ヒラク又はノベルの意、楚臣の奇とは屈原の楚辞を指す。心血を呕き尽さざれば已まずと李賀の母は云ったが、その半ばにして赤衣の天使が連れ去った。――白玉楼中に召された人と云う語源、細瘦とは李賀の風丰、又次の詩の如く長爪であった。

2.李唐中葉幾才人　瓌瑋誰如長爪生
帝愁渠洩化工秘　故借瓊楼鎖玉京
3.隻語何曾犯俗塵　筆鋒随意割空雲
後人不識騒苗裔　牛鬼蛇神蔽却君

2.は唐の詩人多くとも瓌瑋な風格は李賀が第一、只天帝

は造化の秘密を賀が洩らすまいかと愁へて早く天上に召し給うの意。

3. 隻語世を犯すなく、随意空雲を割く詩勢、後人真意を知らず牛鬼蛇神の妖怪と誤伝、元人が特に多く誤伝していると秋室は嘆いている。

秋室は後日出版を志して編集した『錦囊遺彩』の序文にも書いている。

天保六年秋室四十二才、自分の詩稿を删稾(さんこう)して『玉楼鬼訂』と名付けたがその中に注して杜牧が李賀の詩の為に作った序文にも同じく述べている。李賀の詩を賛歎する者は多く賛辞も至り尽せりと見えるが誤伝である。真に李賀を理解した者は韓退之一人だ。他は皆虚心に細読せず、牛鬼蛇神の四字が長吉を蔽い、百代の奇人をして千年の長夜としてしまった。寃なりと弁じている。――秋室も之を強調して後人の評を厳しく指摘している。

4. 我愛李王孫　驚才無等倫(タグイ)　囊盛心血満
筆吐鬼花新　不作世間語　果然天上人
願買色絲繡　常将沈水薫
5. 諸孫甫七感　名既動京華　盱眼空千古
呕心成一家　鬼雄馳鐵馬　電母掣金蛇
追逐無由及　汗流徒自嗟

4. の「我愛す李王孫」と8. の「一生慕蘭誰か我と同じき」の如き李賀に憧れ続けた秋室の心境は李賀を蘭蘭の芳香と慕い続けた事が窺われる。「我は慕う李王孫」と書いた本もあるが同じ気持であろう。才能は無比、世間並の語は用いず、堪えず鬼花の新語を工夫した鬼才は果然天上天帝の処に召され、長吉の句にある「絲繡を買って平原君とならん」と云った心境、沈水の薫香をもって包まん、と。

5. 諸孫甫めて七歳名既に京華に動くというのは唐書李賀伝を秋室はその儘、受容したのであろうが、いくら李賀でも七才で一家を成して京師にその名が知られるとは聊かオーバー、さすが現代の李賀研究者の間では否定している。李賀の崇拝者で著名な明の徐渭（文長）の句に「電母回身不敢視」とあり、之に則り、又蘇東坡の句「汗流籍湜走且僵」とある。これを念頭に作ったものである。

6.隴西錦囊客　二十老冥搜　竟日孤吟苦
通眉一字愁　楚騒真可続　山鬼好相謀
偶遇紫皇識　呕心向玉楼
7.錦囊負小奚　一日幾回開　幽鬼膽應破
阿姥心轉哀　無人容傲忽　惟帝重奇才
莫恨緋衣召　乗軒好遠災

6.7.共に錦囊の語に注目、終日苦吟し一字の改訂に沈痛、山鬼に謀られ、紫皇に識られ、遂に心血を吐き乍ら天上遠く玉楼に赴くという前者と大同異局の後者は錦囊を小奴に背負わせ詩作に耽れば母は心痛み、幽鬼はねらい、天帝のみは才を重んじて天上に召す、というのである。前者は劉克荘の句に「茂陵三十老」又長吉の通眉とは、濃い眉で知られ一字の推稿に苦心したという意。

後者幽鬼の膽應破るべしとは韓退之の句に「険語鬼の膽を破る」を指し、阿姥とは李長吉は母を称して阿姥となすと注がある。

李義山の長吉小伝に「多くの人は排擯するが天帝のみは奇才を重んず」という不可解な語あり、「帝遣乗軒災自滅」という長吉の句あり、徐渭の注に「一死すれば自滅なり」と、又「乗軒とは死して上升する也」と注してある。

8.欲把澧蘭相比擬
一生慕蘭誰同我
蜃気吹空成繡閣
瓊楼奇語更多少
諸孫風骨出塵気
千歳継騒惟有君
鬼斧因雨起荒墳
除却天人那得聞

昔の人云う長吉の骨法は当に沅芷澧蘭之間に之を求むべしと。諸孫の風骨は塵氛を出づとあるように俗塵の風を離脱している――これが故に秋室は一生慕い続けた詩人の真髄であろう。蜃気楼が空中に繡閣を画き、鬼斧が雨夜に墳墓から起上り、鬼気迫る奇語、長吉の心情そのままが秋室の心情でもあったろうと思われる。然し、牛鬼蛇神の妖怪変化をのみ本領とするのではないというのである。

『讃昌谷集』十首を見れば秋室の着眼が理解され同時に李賀の実相も理解出来るかと思って抄出したが果してどうか？『昌谷集』とは李賀集である。十首中二首は書いて後で黒く消してある欄外に可去と注してある。詩の

（21ページに続く）